

氏名 木村尚志

本論文は、鎌倉時代の和歌の表現を中心として、とくに東国との関係に注目しつつ、その和歌史上の特質を分析したものである。本論は、四章計十二節に分かたれている。

第一章は、平安時代あるいはそれ以前から詠じられていながら、中世になってその内実を変質させてきた歌枕に着目して、これを考察している。具体的には、「浜名の橋」「水無瀬」「鳴海」「浮島が原」「足柄」および駒迎関連の東国の歌枕を取り上げ、それぞれの表現の歴史をたどった上で、当該歌枕の実際の地形や背景にある故実などを検討することを通して、中世に入り性格づけし直される様相を検証している。古代和歌の継承にとどまらない、中世固有の歌枕の形成を明らかにした点に、創意が認められる。

第二章は、後嵯峨天皇の皇子で鎌倉幕府将軍となり、鎌倉歌壇の隆盛を実現した宗尊親王の和歌表現について論じている。本論文が注目するのは、主として親王の先行歌からの表現摂取の問題である。従来親王の和歌に関しては、帰京後の述懐歌や特異な叙景歌に関心が集まり、先行歌摂取の見られる和歌については、習作と見なすにとどまっていた。本章は、これを意識的に獲得された方法に基づくものと捉え、その方法の実態およびその方法が形成される経緯を分析している。中でも新古今時代には禁じられていた、時代の近い作品の表現を摂取する表現に対して、縁語や古歌を媒介としつつ、景情融合した歌境を表現化する周到な方法的意識が見られることや、その方法が飛鳥井雅有・藤原為家の作品から触発されたものであることを指摘した点に成果が認められる。

第三章は、中世において『万葉集』がいかなる意味を持っていたかを考察している。第一節では、院政期において『万葉集』に関わって「古風」を問題とする言説を分析し、そこから、王朝的美意識を再興しようとする志向性を析出している。第二節は、宗尊親王の和歌における万葉摂取を総合的に明らかにしたうえで、それらと『五代簡要』『万葉集佳詞』などとの密接な関連性を指摘して、親王の万葉摂取が御子左家歌学を継承するものであることを解明している。

第四章は、述懐歌が中世和歌において重要な意味を持つに至った経緯をたどり、琳賢と藤原基俊の対立に新旧両派の対抗を指摘し、中世秘伝の一環を形成する「鷹百首」の和歌を分析するなど、中世和歌の特徴を端的に示す三つの論点について、新たな視座から分析している。

どの考察も、豊富な具体例をもとに実証することを旨としており、それが説得力の源泉となっている。反面、冗長さや一部結論への説明不足を感じさせる点もあるなど、今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。